

ハイエク全集 -5 政治学論集「自由主義の再興に向けて(2)モンペルラン協会の誕生 - 本会議での議題案(開会演説) - 」 春秋社 2009年12月20日刊を読む

モンペルラン協会の誕生 - 本会議での議題案(開会演説) -

それでは、この会合に私が提案した議題に移りましょう。当然、これが最初の議題となりますが、すでに配布いたしまして、これから説明を加えます提案は単なる案で、この会合で採択するか、しないかは、自由であります。

この会議で検討すべき議題として提案し、皆様の承認をいただきましたもののなかで最初の議題は、いわゆる「自由企業」と、真に競争的な秩序との関連についてです。私としては、これは非常に大きな問題であり、ある意味では最重要問題であると考えており、今回の議論の大半がこの点についての検討に当てられることを望んでおります。この分野こそ、私たちが確固たる意見を持ち、広く受け入れられるべき経済政策についての共通理解を打ちたてなくてはならない最重要分野であります。この範囲の問題については、出席者の大多数が活発に関心を寄せており、世界中のさまざまな場所で並行して、ばらばらに行われてきた研究を結集することが緊急に求められています。この問題に十分に対処するには、完璧な自由主義的経済政策綱要が必要であり、それゆえに、その影響たるや、計りしれないものになります。全体問題の検討が終わったら、個々の問題別に分科会で話しあう形がいいかもしれませんが、その方法でなら、私がパンフレットに記した他のいくつかの問題についても議論する余裕ができるでしょう。また、それ以外にも、すでに複数の参加者によって提起されている問題ですが、現在多くの国々がとらざるをえない集産主義的経済発展の根拠になっているインフレ強制策の問題などについても、話しあうことができるでしょう。一番いい方法は、全体的な問題について1、2回の話し合いをもち、それぞれの終わりに、30分程度、その後の方針を決めるための時間をとるといった形になるでしょうか。本日の午後と夕方の話し合いは、全体問題の検討に当てることを提案いたします。全体問題については、午後になってもう少しお話しすることをお許してください。勝手ではありますが、すでに、シカゴのアーロン・ディレクター、フライブルグのヴァルター・オイケン、さらにパリのモーリス・アレに、その最初の討論をお願いいたしました。その後の議論を進めるに十分以上の材料が揃うと確信しております。

経済秩序の規範についての問題が最重要議題であることはもちろんですが、それ以外の議題についても、会議の前半に話しあう時間をとった方がいいと考えております。現在われわれが直面している政治的および社会的危機の根源が、純粹に経済的なものだけではないこと、また自由社会を維持していくためには、現在優勢な経済理論を変革するだけでは十分ではないこと、これについては全員が賛成することと思えます。さらに、会議の始めのうちに、広く全体を見渡し、さまざまな角度から問題

を検討するほうが、参加者が早く互いに知りあうのに役立つでしょう。細かい問題の技術的な側面については、その後に話しあうことにしてもいいと思います。

過去二世代にわたって、人間にかかわる事象についての反自由主義的な見方を普及させるのに、歴史解釈と歴史教育がその主要な道具となってきたことについては、異論はないでしょう。社会で起こる事象はすべて避けることのできない歴史発展のルールに則った必然的な結果であるという運命論の普及、成功か失敗かの判断の他にはなんの道徳基準も認めない歴史的相対主義、個人の業績とは区別して大衆運動を強調する傾向、そして、将来を形成するにおいて、思想の力より物質的必要を重視する傾向などはすべて、経済問題同様、重要で広範な一つの問題のさまざまな側面をあらわすものです。私は議題の一つとして、この広範な問題の側面の一つ、つまり、歴史編集の方法と政治的教育の関連を提起してみたのですが、そこからはすぐに、さらに広い分野に視点が広がることになるでしょう。この問題については、ウェッジウッド女史とアントーニ教授がすでに、議論の口火を切ってくれることを承知していただきました。

イギリスよりもヨーロッパ大陸とアメリカで広く流布している自由主義には、さまざまな要素が含まれていることを理解しておくことが重要です。それは一方で、自由主義の信奉者を社会主義や国粋主義に走らせ、もう一方で、そのあまりの合理主義に、個人の自由についての基本的価値観を共有する人びとさえも反感を覚えざるをえなくなりました。この合理主義的傾向は、価値観の有用性(その究極的目的は決して明らかにされることはないのですが)とは個々の理由で証明できるものであり、科学は、われわれに現状を説明してくれるだけでなく、どうあるべきかの姿まで教えてくれるという前提に立つものでした。この誤った合理主義はフランス革命のあいだに優勢となり、過去 100 年にわたって、実証主義とヘーゲル主義の二つの流れを通じて影響を及ぼしてきたのですが、個人的には、これは知的傲慢の現われだと思えます。この傲慢さは、知っている以上のことを個人に成し遂げさせることのできる自生的な社会の力に敬意を払う、真の自由主義の真髄である知的謙虚さの対極にあるものです。このように不寛容で攻撃的な合理主義こそ、とくにヨーロッパ大陸において、宗教心厚い人びとを自由主義運動から追いだし、彼ら自身決して居心地がいいわけではない反動陣営へと追いやってしまった亀裂を作りだしたのです。真に自由主義的な信念と宗教的信念とのあいだの亀裂が修復されないかぎり、自由主義勢力復活の望みはないと、私は信じます。今日、そうした修復の可能性がかつてなく大きくなってきていることを示す兆候が、ヨーロッパの各地で見られます。そして、多くの人びとがそこに、西洋文明の理想を維持できるという希望を見出しています。だからこそ、私は、自由主義とキリスト教の関係という議題を別個の議題として、ぜひとも提案したかったのであります。1 回の話し合いで、この議題について深く追求するなど望むべくもありませんが、この問題に面と向かって対峙することは必要だと考えます。

これ以外に議題として提案した一つは、規範そのものを問うというよりも、現在の問題にたいしてその規範を適用する際の実際的な問題についてのものです。ドイツの将来についての問題も、ヨーロッパ連合なるものの可能性も、緊急の懸案事項であり、政治研究者の国際的な集まりであるならば、意見交換で頭を整理する程度のことしか望めなくても、この二つを考慮せずに済ますことがあっては

なりません。この二つについてはなによりもまず、現在の世論の状況が障害となり、理性的な議論は行えなくなっていますが、だからこそ、この問題から逃げないことがとくに重要な任務となります。この二つの議題について、議論の口火役を参加者の方々をお願いしたのですが、承知してくれる方がいなかったということが、この問題の複雑さを物語っているように思えます。

最後にもう一つ、議論していただきたいと願っている事柄があります。問題の本質にかかわると私を感じているもので、「法の支配」の意味とその条件についてであります。私がこの議題を正式に提案しなかったのは、この問題を適切に論じるためには、会の参加者の範囲を法律家にまで広げなければならなくなるからです。これもまた、私の力量不足のために不可能となりました。このことに触れたのは、きちんと組織化された団体となってから、われわれに課せられた責務のさまざまな側面に適切に対応するためには、広い範囲に網を広げなければならないことを明確にしておきたかったからです。

P31 ~ 34

- 2010年1月13日 林明夫記 -